

あすに備える

大阪大コミュニケーションデザイン・センター

渥美 公秀助教

あつみ・ともひで 専門は社会心理学。日本災害救援ボランティアネットワーク理事。日本グループ・ダイナミックス学会常任理事。45歳。



のボランティアで1カ月ほど学校で風呂炊きをした。その後、西宮ボランティアネットワークができて、記録係を務めました」

「例えは、ある小学校の盆踊りに防災コーナーを設ける。3×3のマス目にカエルの絵を描いて、裏返して回転するようにしておく。そこに消火器に入った水を当てる。顔がこっちを向いたマス目の点数を競ったりする。これで消火器の使い方と、長持ちしないことを教えます。こうして子どもと遊びながら、親にも勉強してもらおう。点数のスタンプを押してもらって、スタンプがたまると古いおもちゃに交換できる。おもちゃを『換える』ということに加えて、地域を『変える』という意味も込めています」

「グループ・ダイナミックスで最も重要とされているのは、グループの変化を起こすこと、あるいはグループに変化があればそれとともに歩むことです。マップ作りでも、カエルキャンピングでも、子どもたちは遊びを通して変化し、親たちも変化し、そんなことをやっている地域もそれまでとは違う集団になってくる。ただ、楽しいだけでは十分ではなく、知識として教えないといけないこともあります。学校と連携することも考えていかないといいません」

「そうした取り組みの究極の目的は？」

大地震が起きたとき、住んでいる街はどう姿を変えるのか。道路は倒壊した家屋でふさがれ、あちこちで火災が発生して、身動きがとれなくなるかもしれない。こんな事態を普段から想定し、子どもたちが自宅周辺を巡りながら消火栓の場所などを地図に書き込んでいく。遊びを通して防災を学ぶ、参加型の取り組みの狙いを聞いた。

(編集委員・野呂雅之)

「どうやって地図(防災マップ)を作るのですか。」
「マップを作る1週間か2週間前に大人が集まってもらいます。市役所や消防署、警察などの担当者にも来てもらって消火栓のあるところ、防火水槽はどこにあるのかなどを教えてもらおう。子どもを

子どもと作る「マップ」

歩かせるので、保護者の方々も聞いておかないといけません。実はそこがミソです。大人が知らず知らずのうちに防災を学びます」
「そして当日、子どもたちがやってくる『探検隊』に仕立てあげて、大発見シールや突撃インタビューシートなどを渡します。探

親も地域も共に変えたい

検を通して自宅周辺の危険なところを知り、気づかなかったところを知ってもらおう。4、5人を1グループにしてカメラ担当や記録担当などを決めて、帰ってきてから地図をつくる。自分の街を発見、再発見する。『わが街再発見ワークショップ』と名付けました」

「阪神大震災で被災したそうですね。地図作りを通じて防災教育を考えた背景には、震災の体験が先ではないかと考え、初めて

「西宮市で被災して、直後から安井小学校でボランティアをしていました。専攻しているグループ・ダイナミックスは人間の集団の全体的な動きを観察する学問です。震災は大事な研究現場じゃないかという議論もありましたが、現場研究とか学問とかよりも、みんな苦しんでいるのに助けに行くのが先ではないかと考え、初めて

「イサーカエルキャンピング作りでも、カエルキャンピングでも、子どもたちは遊びを通して変化し、親たちも変化し、そんなことをやっている地域もそれまでとは違う集団になってくる。ただ、楽しいだけでは十分ではなく、知識として教えないといけないこともあります。学校と連携することも考えていかないといいません」

「そうした取り組みの究極の目的は？」